

チブ（丸木舟）

チブ（発音は Chip）は丸木をくり抜いたカヌー（日本語では「丸木舟」）です。運搬や商売、漁業に用いられる大切な道具として、伝統的なアイヌ生活の一部となっています。

チブとは大きな木を削りだして作られる舟で、基本的にその木材には、頑丈で軽く柔軟なカツラやヤナギが用いられます。新たな舟を作る時はまず木材の形を整え、焼き石で暖めた水を流し込み、木材を膨張させ、強度を上げます。

アイヌ社会では、他の種類の舟も伝統的に使われてきました。例えば、ヤルチブやイタオマチブなどです。ヤルチブ通常の丸木舟と比べるとサイズが小さく、その材料には木の代わりに樹皮（主に樺の木）が使われていました。一方、イタオマチブはサイズの大きい丸木舟です。

イタオマチブは頑丈なロープを木の穴に通すことで厚板を舟の両側に貼り付け、容積を拡張しています。さらに、イタオマチブにはセール（帆）とオール（櫂）が備え付けられており、長旅を可能にしています。この船は何世紀にもわたって、北海道と本州、アジア諸国との貿易に使われました。アイヌの商売人たちは、毛皮や干物を本州や中国に持ち込み、鉄や酒、錦織物、漆器、首飾りに使うビーズや、他の素材などを持ち帰ってきました。

切り倒す木を選定する段階から、チブの建造には様々なアイヌ式儀式が介在しています。まず人々は山の神に対して、イナウ（祭具）と祈りの言葉で木を伐採する許しを得る必要があります。そして、次のような祈りの言葉を暗唱しながら、木のカムイ（神）に感謝します。

「私たちはあなたを舟にします。美しい祈りの棒で飾り付けをし、穀物と鮭であなたを満たします。神にとってこれは最高の栄誉であり、神の世界に戻ったとき、他の神にも称賛されることでしょう。どうか、丈夫な体を保ち続けてください」

舟が完成すると、その祝福のために進水式（チブサンケ）が行われます。舟が水に浮かべられる前に、参加者たちは新しく作られた祈りの棒でボートを飾り、川の神に安全な旅を祈ります。